

28. 本邦唯一 「ラヂオ」
通俗無線電話雑誌

大正11年(1922)11月から翌12年9月まで(関東大震災で印刷機能が壊滅するまでの僅か一年足らずの間)、東京発明研究所内ラヂオ社(社長濱地常康氏)が主幹となられた「ラヂオ」という雑誌がありました。その副題の[本邦唯一 通俗無線電話雑誌]が聊か滑稽にさえ見えますが、時代的背景の違いを感じさせます。その概要は第一章「六極眞空球」で述べましたが、ここでは表紙の絵もご紹介してその功績を偲びたいと思います。

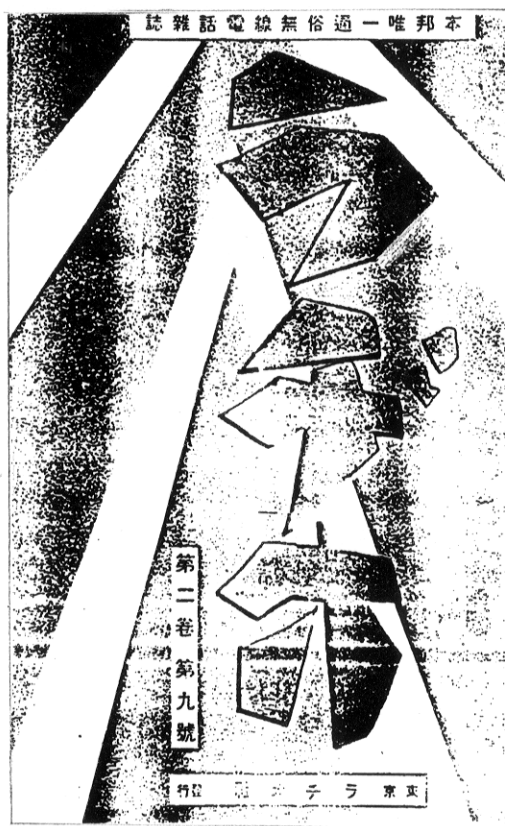
創刊号の巻頭にある「近年科学奨励の聲が順次盛んに成り行くのは甚だ喜ばしき事である」と云う気負った出だしと、よもや最終号との意識のないポッキリ切れた終わり方、即ち「東京発明研究所の型録の希望者は郵券十銭を送付すれば即時配布する」が共に印象的です。

嘗てドウフォレ氏始め多くの発明家が自らの特許係争で身を滅ぼしましたが、彼とて例外でなく、百余件に及ぶ自らの特許について、宣伝と守りの姿勢が著書の随所に見られます。

未だラヂオそのものが各家庭に行き亘っていなかったこの時代にあって、彼の将来を見据えた啓蒙活動はまさに偉大であったと思います。



創刊号 大正11年(1922)



最終号となった大正12年9月号

